

## カッコいい

教授 高槻成紀

私たちの目の前で馬が立ち上がり、大きく体をゆすって跳ね跳んだために、馬の背で懸命にしがみつこうとしていた若者が地面に叩き付けられた。私たちは固唾を呑んで見守っていた。その馬は疾走しはじめた。見ると落馬した若者はそのまま引きずられている。かなりの距離を地面に体をこすりつけながら引きずられて行った。だが、やがて馬は停まった。どうやら馬のほうがあきらめたようだった。

その馬を引き連れて帰ってきた若者は晴れやかな表情で笑った。高校生くらいであろう。昔の日本にもいたような風貌のなかなか凛々しい若者だ。

「カッコいいー！」  
いっしょにいた学生がことばを漏らした。確かにそうだった。



\*\*\*\*\*

「あいつカッコいいから、モテるんだよ。背が高くてサ。俺もあと5センチ欲しかったよ。」

自分がもう5センチ背が高ければ女の子にちやほやされると思っているらしい若者の会話を聞いた。背丈で男を選ぶ愚かな女の子にモテたいと思う愚かさを、女の子は嗤ってばかりはいられない。痩せていることが美人の条件でもあるかのような誤った宣伝に踊らされて、ダイエットをする女の子はごくふつうにいる。若いということは、見た目が気になるものであり、それが向上心につながりもす

\*\*\*\*\*

モンゴルでは今でもゲルに住んで放牧を営む人が大半だ。現金収入はあまり多

るのだが、こうした判断力の欠如は哀れさを誘う。

同じことばでありながら、この「カッコいい」はあのモンゴルの若者をみたときに出た「カッコいい」とは明らかに意味が違う。日本でのそれは見てくれがいいということが、モンゴルのそれは「感動的」とでもいうべきものだろう。広い意味での「すばらしい」だが、「fantastic」というのとは違うように思う。

「wonderful」でもなさそうだ。そのことを少し考えてみたい。

くないだろうが、生活はかなり豊かだ。戦前戦後の日本の山村のような貧困さと

は無縁で、食べ物は豊富だし、人々の体格もよい。子供は家畜の中で育つ。ヤギやヒツジはおもちゃがわりでもあり、友達でもある。幼い子供でさえ、馬を自由に操る。

しかし家畜を育てるといのは簡単な営為ではなく、多くの知識や体験や判断力なしには能わない。そのことを子供は学びながら育てゆく。そういう生活が少なくとも数百年続けられてきた。

モンゴルの子供にとって父親はあこがれの的である。なんでもできるし、知っている。ヒツジを殺して解体するとき、そうすればよいか。馬が具合が悪くなったときはどうか。そうしたことのすべてを父親は知っていて、困難を乗り越えてきた。子供たちは、自分も早く大きくなって、あんなことをしてみたいとあこがれる。

落馬させられ、馬に引きずられた若者は、その少し前に同じ馬かどうかわからないが、若駒を追っていた。若者は竿のようなもので若駒の首をとらえようとしている。長い距離を走って馬に「この人にはかなわない」と思わせ、屈服させるのだ。

馬に引きずられたとき、激しい痛みが体を襲ったに違いない。だが彼は決して

\*\*\*\*\*

ひるがえって現代の日本はどうだろう。父親の背中をみて育ち、あこがれ、成長の過程で父に追いつき、「あとは任せてください」と言うといった人生のありかたは、「因習にとらわれた古くさい不自由さ」という軽薄な思考によっていとも簡単に捨て去られた。「ものわりのよ

手を放すことはなかった。父親から教えてもらった馬の扱いかたを理解し、そのやり方を見て学び、自分でも訓練してきたに違いない。その父親も若い頃、今のおじいさんにこれを教わったであろう。そうした思いが「自分がこの手綱を放すわけにはいかない。」と思わせたであろう。それはスポーツではない。生活そのものなのだ。

そうしたことが綿々と継続されていて、今自分の目の前で展開されていること、そうしたことに私たちは感動したのだと思う。



い」大人たちは「よく勉強していい大学に入れよ」とは言うが、本来の人間のもつ親子関係がどうあるべきかというようなことはまるで考えていないのではないか。テレビの前でビールを飲んでいる父親しか見ないで育つ若者に、どうして父親が尊敬できるだろうか。

私は自分の目で見たモンゴルの若者の表情を、一部の先進国の「指導者」がいうように、「古い非効率な放牧を墨守す

る愚かな農民」とはまったく見ない。むしろ、自分の目で見たままに「カッコいい」と思う。